

「輸出農業の動向」によせて

東 畑 精 一

わが國が過去に於て廣範圍の植民地を擁していた頃を描いて農産物をめぐる貿易關係を顧みると、何人も大きな經濟上の偏りとでも形容したいものを感じざるを得ない。恚うなのだ。まず輸入農産物をとつて見るに其の大宗は棉花と羊毛とであつた。しかし之等の國産は殆んど全く見られず——或いは棉の如く全く跡を絶つてしまつて——、日本農業と農民とは此の尨大な農産物輸入をわが關せざることとして、氣樂に見送ることが出來た。輸入農産物と國內產農産物とは云わば無縁のものとして存在し、一個の統一ある農産物市場關係を直接に形成するまでは、至らなかつたのである。他方に於て輸出農産物に於ては斯程までの極端な偏りは無かつたにせよ、しかも例えば本書にも示してあるように生絲や除蟲菊や寒天やアンゴラ兎毛をとらえても——例外は茶や蜜柑である——その七割以上も輸出せられて居り、國用品はその傍らに、しかも多くの場合は低級品として僅かの地位を占めていたに過ぎない。

これらの輸出農産物は生絲に於てその數量が莫大であつた。生絲は輸出貿易のキングたるの地位を永い間しめて居た。農産物輸出總額の中では常にほぼ八五パーセントの位置を占め、他の農産物は残りの一五パーセントしかの重要さよりなかつた。また此の後述の農産物は大半輸出されるとしても、國內產の農家受取り總額に比べては全體として略々一・五乃至二パーセントの價值量の比重しか持つていたに過ぎなかつたこと本書に示されるが如くである。

斯様な次第で生絲の場合を假りに離して考えると、日本の農業は農産物輸入によつても影響せられず、輸出によつても極めて僅少の重要しかもつていなかつたことが分明する。日本の國民經濟は世界經濟の循環過程に入りこみて肥大して來たものであり、國際貿易を通じて國內市場の育成も出來たのであつた。戦前の主要諸國において國內經濟活動に對する國際經濟活動の比重はイギリスの場合を除き恐らく日本が世界中で最も大であつたであらう。

斯かる貿易濃度の高かつた日本であつたにも拘らず、國內の最大の産業であつた農業が、斯くも國際的に孤立し、超然として、ただ獨りの道を歩んだことは、一つの國際經濟的な奇蹟であつた。そうして日本が國際貿易に入り込むことはいよいよ深くなるにつれて、このことがまた日本の農業の特質となつたのである。日本經濟はこの點にも亦大きな偏りをもつていたと云わねばならない。この事態は多くの事情によつて生れたし、また逆に多くの事情を生むのに役だつた。

一、農業を國際的競争から隔離していくことは政策的にも寧ろ要請せられた。これは特に食糧の國內自給は國防のために必要であるとの農業哲學の援護のもとに一層つよめられた。しかるに人口の漸増はこの自給を常に窮屈にして來たので、農業は漸次に食糧農業に、更に植物性食糧農業におし込められて來て、他種の農業の成立の餘地を少くした。工藝作物や、畜産への農業の分化は常に制約されていた。

二、國際的競争に伴う農業の合理化、近代化が著るしく妨げられた。海の外からの刺激がない日本の農業は此の意味では世界經濟上は一種の獨占的産業たるの性格をもつた。世界市場の動搖を感ずるところも尠なかつた。

三、日本の食糧品價格は直接には日本の中での條件で形成せられる色彩が強かつた。それがために日本の多數の労働者の生活費、従つて賃銀水準は日本的に形成せられミクロコスモスの産物であつた。日本の（輸出）工業品の價格

は國際經濟的に形成されるところが強いのに反して貨銀だけは別であつた。ここに日本の嘗ての爲替ダンピングが諸外國の夫れの場合よりもヨリ永く效果を持続し得たし、また購買力平價の成立がおくれ得たし、貿易利潤の大きかつた所以もあつたように思う。

四、農産物の輸出は——生絲を除いて——大きな關心の對象とはならず、國際市況通報、市場開發も殆んど爲されず、政府は殆んど無爲であり、漸く民間一部の人々がこれを貧弱ながら爲し得たにすぎなかつた。

五、生絲を含めて兎も角も輸出農産物として登場したものは畑作物であつた。ここではその限りで水田農業に於けるよりもいささかの近代的な雰圍氣がただよい得たかに思う。

ともかくも斯かる情況が戦前に於ては輸出農産物を取りまいていた。いまや改めて戦後の、これからの事情は如何であらうか。

永い間外にむかつて閉されていた幕末の日本の先覺者が如何に強い憧憬を外國の知識についていたかと思つて、十年の間制約せられた一時は皆無となつていた貿易の再開に對しては多大の期待が懸けられた。農業についても事柄の性質は同じであつた。食糧の輸入が行われ始めるのと比例して農産物の輸出が關心にのぼつた。のみならず、斯かる輸出の増大がまた必要であるとの見地すら強化せられた。これには從來見られなかつた一つの論理があつた。日本は國內に於て今迄よりも遙かに大きな雇傭口をもたねばならず、農業もまた之れを分擔せざるを得ない。それには既存の耕地の利用に於て一層大きな價值生産をなさなければならぬが、それが可能なのは國際市場の新たな開發によるところが多い。農産物の國內市場といえども既に述べたように國際貿易の媒介によるところが多いのである。斯くて今迄とは異つて日本農地の利用は單に國內的のみではなく更にすんで國際的な適地適作の方向に向つ

て進まねばならぬ。そうして之れは更に進んで、少くとも經濟的見地に立つて云う限り、國內で不適地に於て食糧生産に従うよりも、之れを——可能ならば——輸出農産物の生産に配當して、後者を以て食糧を購入するも可なりとの論理に達している。食糧自給は一度びは經濟的範疇の眼鏡で見直さなければならぬ。云い換えたならば日本は其の農業の種類、方向の選擇に於てもつともつと比較的有利性、コンバラテヴ・アドヴァンテージを顧慮すべきである。これによらなければ農業に於ける雇傭口の増大が望まれないで、人口が農村に集積することは貧弱化の増大の有利な原因となると云うのである。

そこで輸出農産物の將來に就いての種々の問題が生まれてくる。

まず第一にわれわれは果して新たに其の市場を獲得出来るか否かの根本問題がある。市場の擴大がある限り、貿易は生産力増大の働きをもつ。嘗て封建の時代に於て限られた地域、いわゆる領域經濟にあつた日本の諸産業が明治とともに國民經濟に擴大せられた市場をもつに至つた場合と同じ性質のことながら、場面を改めて今まで閉じられていた農産物市場が廣く世界に解放せられるに至つて一層つよく再現しないであらうか。今迄生絲を除いて國內生産の僅かに一・五乃至二パーセントが農産物中で輸出による受取價格であつたことは、必ずしも今後の市場の狭少を指すものではない。今までは食糧の國內自給政策によつて押し込められていた農地利用の間隙をくぐつて克ち得ていたパーセンテージであつたに過ぎないのである。

第二に、しかし假りに斯かる市場の可能性がありとしても夫れは實現し得るかが問題である。それには今日まで永く遮斷せられていた國內價格と國際價格との連繫の問題をまず解決せねばならない。これは常に混亂を伴う。閉された社會は單に經濟上のみならずあらゆる點でその社會固有の價值體系をもつ。それが改めて他の價值體系と接觸、參

差、統合せられるからである。これは嘗てなき大きなショックを日本農業に與えるであろうことは例えば今後の食糧品の大量輸入の場合を考えても充分うなずけるところであり、また農産物輸出が増すに従つて然り。

第三に市場の可能性をおびやかす要因を見なければならぬ。今迄の日本の輸出農産物はいわば日本特有のものであつた。特有と云うのは一つは世界に他に生産地が無かつたか或は少なかつたこと、二つには其の代用品産業が無かつたと云うことに外ならぬ。しかるに世界をとつて見ると産業的進歩は常に行われている。斯くて生絲はレーヨン、ナイロンを、除蟲菊はDDTを、罐詰は急激冷凍品をもつが如くである。また世界に於ける開拓は新しく各地に企てられる。遠くケニアの植民地は日本の除蟲菊生産を脅かすものに短日月の間になつてしまつてゐるが如くである。

第四、斯様にして市場開發の可能性がちぢめられる。これを打ち破つた市場の持続性を得んとするならば、われわれは再び國內に歸つて輸出農業そのものの實體について検討を加えなければならぬ。

今まで貿易によつて多少なりとも近代化のそよ風は輸出農業の一部に吹いたが、しかし根本的には、日本の輸出力は生産費の低下によるよりも生活費の縮少によつて伸長し得たところが強い。これはあたかも國際的孤立に置かれた食糧品の場合に Efficiency profit よりも Scarcity profit が地主や自作農民に約束されていたのと對比せらるべき性質のものであつた。そうでは無くて今や改めて輸出農業に近代的な産業としての合理化の方向を發見することによつて、市場開發が爲し得るかを問ひ質さなくてはならないのである。それには略々二つの大きな場面があろう。

一つは云わば農業の經營内部的な合理化の可能の問題である。多くの輸出農産物が大體に於て農家の副業品であることは之れを困難にしている。農家の副業が夫れ自體合理化過程の領外のものであることは、あらゆる事物が非合理的であつた中世に於てすら取りわけ左様であつた時から今日までつづいてゐるのみならず、副業を包含した農家の全

體をひつくるめて考察せられる時にも亦しかりであるからである。そこに假りにあるのは生活的合理性であつても生産的合理性ではない。そうして農産物が一度び横濱の港を離れるときに正にこの後者の合理性の世界に飛び込むのである。更にまた輸出農産物の大半は加工過程を通過するものである。さり乍ら加工過程が原料價值に附加する部分は加工物價值の恐らく二〇乃至三〇パーセントであろう。斯かる商品の常として人々は加工に費すよりも寧ろ原料の獲得に費す熱意の方を遙かに強くする。要するに商業的色彩の強い産業の生産物として輸出農産物が現われる。そうして重要なことは斯かる農産物の生産者と加工業者（商人）とが人格的に分離していることが、斯かる商業的性質を一層強くする點にある。輸出品が桑港や上海に著く遙か以前に、横濱に著く迄に、大きな問題が既に含まれているのである。原始生産者がその加工を何所まで商業的過程としないで産業的過程として——云い換えたならば、加工の精度を高めて——合理化を爲し得るかは重要な問題である。

また他の經營外部的な合理化も當然に考えられる。生絲産業の現狀がよく示すように合理化過程を進めるときは單に個別經營の規模にとどまらないで、自ら當該産業全體としての産業規模の適正化の問題に至らざるを得ない。かく産業の規模をとりあげるとは日本の從來の經濟政策に於て最も輕視せられた問題の一つであつた。市場の規模、市場の如何、既存生産要因の規模と常にからみ合せて持続的な産業規模の適正化を圖することは、同時に個別經營の合理化を可能ならしめる最大の槓杆である。また現狀の貿易は日本の生産者にとつても輸出商人にとつても一種の「めくら貿易」であることは萬人の知るところの如く、貿易はいわば租界貿易の實體をもつている。これは當然に國交のひらけると共に漸次解消し得られることであろう。しかしその曉に於ても尙お貿易形態に於て重要な問題が残る。群小の貿易商があらそつて貿易相手を求め、小なる資本は少許の商況動搖に堪え得ず、これが救いを投げ賣りとレベート

とに求めて貿易の大道を攪亂したり或いは之れを農民に轉嫁する態が過去の實體であつた。かかる形態の貿易に大きな合理化過程を加えることは、持續的に日本の農産物輸出を擴大する所以でもあるが、また同時に貿易による農業の近代化を實現してゆく一つの道でもあらう。貿易の再開、統制の撤廢は過去に向つての單なる復元であつてはならず何等かの新しき要因を農村に植えつけるものたらしめるところに、新しき農業行政の道があると思われる、世界へ日本が正常的に入り込むことは小さな農産物一つをとつても中々容易なことではない。爲すべきこと、爲し得べきことが中々多いのである。

この特輯號の載せるところの幾多の農産物の幾多の場面は以上述べるところ以外にも尙お多くの問題を提起するであらう。

輸出總額に對する農產品輸出額の比率 (%)

		農 産 品			
		耕 種	畜 産	蠶 糸 業	計
1868—1872	明1— 5	28.1	0.1	56.9	85.0
1873—77	6— 10	34.7	0.1	47.0	81.9
1878—82	11— 15	30.7	0.1	43.1	74.0
1883—87	16— 20	25.0	0.5	43.3	68.9
1888—92	21— 25	19.1	0.3	40.5	59.8
1893—97	26— 30	14.2	0.3	35.2	49.5
1898—1902	31— 35	9.8	0.4	29.4	39.6
1903—07	36— 40	9.5	0.4	28.0	37.9
1908—12	41—大1	9.4	0.4	31.2	40.9
1913	大 2	8.2	0.2	32.1	40.6
1914	3	8.7	0.2	28.7	37.6
1915	4	9.7	0.1	22.8	32.2
1916	5	8.4	0.1	25.1	33.6
1917	6	10.4	0.1	23.9	34.3
1918	7	10.6	0.1	20.5	31.2
1919	8	6.9	0.1	31.3	38.3
1920	9	7.0	0.2	21.4	28.6
1921	10	5.1	0.1	34.3	39.5
1922	11	5.3	0.1	42.0	47.3
1923	12	4.9	0.1	39.9	45.0
1924	13	5.5	0.1	39.3	44.8
1925	14	5.7	0.1	39.6	45.4
1926	昭 1	6.7	0.1	36.8	53.5
1927	2	6.0	0.2	37.9	44.1
1928	3	7.0	0.3	37.8	45.0
1929	4	6.4	0.3	37.0	43.7
1930	5	7.4	0.3	28.9	36.5
1931	6	7.3	0.3	31.2	38.8
1932	7	6.3	0.4	27.4	34.1
1933	8	6.6	0.4	21.2	28.3
1934	9	6.3	0.4	13.5	20.2
1935	10	6.8	0.5	15.9	23.2
1936	11	6.1	0.7	15.0	21.9
1937	12	6.1	0.6	13.3	20.0
1938	13	8.0	0.5	13.8	22.3
1939	14	8.4	0.5	14.4	23.3
1940	15	8.4	0.5	12.4	21.3
1941	16	7.4	0.5	8.4	16.3
1942	17	6.1	0.5	1.0	7.7

(註) 輸出總額を100とする。